

<特集>

# 「『文化・階級・卓越化』を応用する」 に寄せて

In Applications of *Culture, Class, Distinction*

Introduction

企画担当 相澤 真一

Shinichi AIZAWA

中京大学現代社会学部准教授

2017年10月下旬に『文化・階級・卓越化』の訳書を上梓した。本書の訳書出版は2013年頃から構想、着手を始めたものの、訳してみると、いろいろ問題は生じてくるもので、2017年秋までずれ込むこととなった。とはいえ、2000年代に後半に出たイギリスの調査研究を10年足らずで送り出すことができた意義は小さくないものと自負している。

すでに、本学教員の森田とともに、本書を訳し始めた過程の初期から、本書の応用研究は企画していた（森田・相澤 2015; 相澤・森田 2016 など）。本訳書の出版を機会に、このような内部で行っていた研究を紹介し、一歩進めるとともに、別の訳者の方の応用研究例や、企画者の別の文化に関するプロジェクトにどう応用できるのか、そのような形で広く『文化・階級・卓越化』を応用できる機会を問うたのが、今回の特集である。今回の特集を組むにあたり、2018年3月1日に中京大学豊田キャンパスにて研究会を行った。今回執筆に参加している知念渉氏（神田外語大学）、高橋かおり氏（立教大学、当時東京大学）も今回の論文の基となる発表を行っている。また、今回の論文執筆には加わっていないものの、本研究科構成員である加藤清明、亀山俊朗、松谷満にはコメンテータとして、当日コメントを頂いた。

特集には全部で4本の原稿が集まっている。1本目は、知念渉（神田外語大学）の論考である。知念氏は、対応分析の方法で生徒文化を読み解く手法に示唆を得て、彼が対象とするヤンチャな子らが集まる学校の生徒文化を対応分析でどうプロットできるかを示した論考である。当日の議論でも対応分

析はサンプルサイズの小さいデータでも運用できる可能性を示されていたものが、大きく改訂された論考となっている。過去の生徒文化研究との接続を意識しつつ、2010年代の生徒文化を探索的に読み解く興味深い論考となっている。

2本目は、本学研究科修了生の堀兼大朗を中心として、相澤、森田と共に著した論考である。この論考は、当日は相澤が報告したものをベースとしつつ、知念氏の報告と合わせて報告した際、サプリメンタリー・ポイントあるいはサプリメンタリー変数と呼ばれる投入しない変数の扱いをどうするかということが議論になったことに示唆を得て、対応分析におけるサプリメンタリー・ポイントの扱い方を研究ノートとしてまとめたものである。両者の論文を合わせることにより、『文化・階級・卓越化』でも用いられている対応分析は、どういう問題をどういうふうに解きたいかという理論構築とあわせて、空間構築を行うべきであるという至極当たり前ながら、社会学としての基本地点を気づかせられる結果を提示している。

3本目と4本目は質的調査を主にした論考で、ともに、相澤が2017年度に特定研究助成「グローバル化時代の高度専門技術職のキャリア形成：大学教員と職業芸術家の事例から」を得た折に行った調査が基になっている。3本目の拙稿は、音大生が普通の音楽を学ぶ音大生から職業音楽家へと「卓越化」していく過程で、どのような学びを行っているかに注目したものである。一方で、高橋かおり氏の論文は、プロフェッショナルな海外経験を生かしながら、逆に自分の居場所を専門にこだわらずに見つけていくという点で、同じ調査を用いながらもかなりベクトルが異なる形で、芸術とかかわって生きる人々の生活世界に注目している。また、高橋氏には博士論文執筆中のご多忙の折にご協力を願ったものの、博士論文で示されているというアマチュアとプロフェッショナルの違いについての考察は大変興味深い論点を含んでいる。

今回の分析報告は、どれも萌芽的なものであり、精度の点で不十分な点は少なくない。しかしながら、こうやって4本の報告を並べてみると、『文化・階級・卓越化』の訳書出版を経て、応用調査の面でも一歩進めることができたのではないかと見ている。本特集のささやかな一歩が今後大きな学術的な実りへとつながっていくことを祈念している。

[付記]

本特集は、2018年3月1日の研究会において、社会学研究科の開催として財政的支援を受けただけでなく、本学の3件の特定研究助成の補助を受けている。

2015年度：「日本社会の差異化原理を解明するための社会調査モジュールの開発」（研究代表：森田次朗，研究課題番号：1520513）

2016年度：「現代日本社会における差異化原理を解明するための社会調査モジュールの開発と応用」（研究代表：森田次朗，研究課題番号：1620530）

2017年度：「グローバル化時代の高度専門技術職のキャリア形成：大学教員と職業芸術家の事例から」（研究代表：相澤真一，研究課題番号：1720514）

以上の研究への財政的支援に記して謝意を申し上げる。

[文献]

相澤真一・森田次朗，2016，「社会調査データによる日本の社会的分断線の構成要素に関する探索的検討——東海圏の大学生調査の基礎集計から」『中京大学現代社会学部紀要』10 (1): 169-188.

Bennett, T., et al., 2009, *Culture, Class, Distinction*, London: Routledge. (= 2017, 磯直樹・香川めい・森田次朗・知念渉・相澤真一訳『文化・階級・卓越化』青弓社.)

森田次朗・相澤真一，2015，「P・ブルデューにおける社会調査法の応用可能性——『文化・階級・卓越化』の翻訳作業をとおして」『中京大学現代社会学部紀要』9 (2), 161-188.